

白糠の アイヌ語地名

第7回

○サシウシ(刺牛)

「サシウシ」は「サシ(昆布)・ウシ(群生する)」という意味のアイヌ語で、昆布の産地であったことからつけられた地名です。昔は道東でも有数の生産地として、釧路町の昆布森「コンプ(昆布)・モイ(湾)」海岸と並んで有名だったと言われています。

アイヌ語では「昆布」のことを「サシ」とも「コンプ」とも言いますが、道東では主に「サシ」と呼ばれ、昆布森は特例のようです。

○サシウシチャシコツ (刺牛の砦跡)

刺牛3丁目のJR根室線北側の崖の上に「サシウシチャシ」の跡があります。弓と矢をイメージして作られた記念碑があるところから東側の部分です。

「チャシ」は「砦」と訳されますが、実際は、コタンの儀式や裁

判、会議などを行う特別な場所、

英雄が住む館であったと考えられています。もちろん、非常時には砦として使われました。

また、チャシには「柵」や「柵囲い」という意味もあるとおり、その場所は柵で囲われていたことがわかっています。

サシウシチャシは、南側が高さ



サシウシチャシコツの記念碑

約60層の崖、東側は深い沢に面しており、西と北側には二重の濠と土塁が設けられていました。

チャシ内の竪穴住居跡からは、土器・石器・金属器が出土しており、続縄文時代(約2千年前)から擦文時代を経てアイヌ文化の時代(約2000年前)にまで続くものと考えられます。

◆サシウシチャシの伝説

むかし、サシウシのチャシに美しい女の首長がいた。その名をホルベチャカムイメノコと言った。あまり美しいので、カンドコロカムイ(天上の神様)が天下つたのではないかと言われたものだ。

この女の首長は、立派なシトキ(胸飾りの玉)を持っていた。それを聞いたアツケシ(厚岸)の首長が、それを奪い取ろうと、舟に部下を乗せて不意に攻め寄せてきた。

サシウシコタンのアイヌたちは、常に恐ろしい評判のアツケシの首長が来たと聞いただけで、逃げ支度をするという大騒ぎになった。

しかし、女の首長は少しも騒がず、静かにチャシの中央に立って、天に向かって神の助けを乞う祈りをした途端に、たちまち旋風が巻き起こって、チャシに半ば攻め登

っていたアツケシ勢は、木の葉のように吹き飛ばされてしまった。

〔千葉又イフチの話、市立釧路図書館報「読書人」掲載「釧路地方の伝説」(佐藤直太郎)から引用〕

◆鹿の天下る山とサシウシ

白糠町と十勝の国境に、ウコタキヌプリ「ウコツ(互にくつついて)・キ(する)・ヌプリ(山)」という山があり、山へ猟に行くときには、必ずこの山にイナウ(木幣)をささげることになっている。

ここは、ユ克蘭ヌプリ「ユク(鹿)・ラン(下りる)・ヌプリ(山)」とも言って、むかし、鹿をつかさどる神様が天から鹿を下したところであると言い、最近までよく雷鳴がして、鹿が下される音がしたという。

足寄や白糠地方に鹿が多かったのは、この山に下りた鹿が峰を伝って人間の里へ集まって来るからだと言い、白糠では、この山から峰続きになっている石炭岬やサシウシの岬に酒をあげ、鹿をささげてもらうよう祈願したものである。

〔『北海道の伝説』角川日本の伝説17、差間三平伝、角川書店から引用〕